

11. 自由集会：プログラム・企画趣旨

9月18日(土) 9:30～11:15

- O1 会場 (工 100 講義室) F-01 クマ類の個体数を推定する:DNA マーカ个体識別の有効性と課題
世話人:米田政明(自然環境研究センター)・間野 勉(北海道総合研究機構)
- O2 会場 (応 101 講義室) F-02 野生生物保護学会将来構想検討会企画自由集会
野生生物保護管理の現場を動かす力 ～徹底調査からコーディネートまで～
世話人:吉田正人(筑波大)・横山真弓・鈴木克哉(兵庫県森林動物研究センター)
- O3 会場 (応 102 講義室) F-03 哺乳類種多様性アジア研究者ネットワーク
世話人:本川雅治(京都大学総合博物館)・新宅勇太(京都大学・院理・動物)
- O4 会場 (応 103 講義室) F-04 新石垣空港建設が希少コウモリ類に及ぼす影響
世話人:石井信夫(東京女子大学)・佐野 明(三重県四日市農林商工環境事務所)
- O5 会場 (工 102 講義室) F-05 「管理主義から生態系主義へ～カワウソ・オオカミの復活」
日本オオカミ協会(JWA)2010 自由集会
世話人:井上 剛(日本オオカミ協会)
- O6 会場 (工 101 講義室) F-06 トゲネズミ研究の最近(2)
世話人:城ヶ原貴通(岡山理科・理)・山田文雄(森林総研)

9月18日(土) 19:00～20:45

- O1 会場 (工 100 講義室) F-07 ニッポンのハンターを絶滅から救え!
世話人:伊吾田宏正(酪農学園大学)・松浦友紀子(森林総合研究所北海道支所)
- O2 会場 (応 101 講義室) F-08 ツキノワグマの土地利用は食物資源の変化にどのように対応しているのか?
世話人:山崎晃司(茨城県自然博物館)・小池伸介(東京農工大学大学院)
- O3 会場 (応 102 講義室) F-09 「野生生物と交通」に関する話題～事例紹介から次のステップへ
世話人:浅利裕伸(株式会社 長大)・鹿野たか嶺・野呂美紗子(社団法人 北海道開発技術センター)・山田芳樹(株式会社 ドーコン)
- O4 会場 (応 103 講義室) F-10 鳥獣で喰う ー研究を職業とするための錬金術ー
世話人:平田滋樹(長崎県, 前鳥取県)・小寺祐二(宇都宮大学)
- O5 会場 (工 102 講義室) F-11 東北地方の野生動物調査体制の構築を目指して
世話人:玉手英利(山形大学理学部)・東 英生(哺乳類研究所準備室)
- O6 会場 (工 101 講義室) F-12 標本とその二次資料, 合わせて見るとおもしろい
世話人:栗原 望(国立科学博物館動物研究部)

9月20日(月) 9:15～11:00

- O1 会場 (工 100 講義室) F-13 サンプリングデザインとデータ解析～具体的研究事例に基づくオープンディスカッション
世話人:清田雅史(遠洋水研)・高橋紀夫(遠洋水研)・金子弥生(東京農工大)

- O2 会場 F-14 生物多様性保全に向けたニホンジカの個体数管理
(応 101 講義室) 世話人:濱崎伸一郎(WMO関西)・小泉 透(森林総研)・山内貴義(岩手県環境保センター)
- O3 会場 F-15 かたちの学校 15
(応 102 講義室) 世話人:遠藤秀紀(東京大学・総合研究博物館)
- O4 会場 F-16 ハクビシンの多様性科学
(応 103 講義室) 世話人:増田隆一(北海道大学 大学院理学研究院 多様性生物学分野)
- O5 会場 F-17 ゼニガタアザラシの被害をめぐって:地域社会・水産経済の視点から
(工 102 講義室) 世話人:和田一雄(海獣談話会)
- O6 会場 F-18 滑空性哺乳類の移・食・住ー滑空と採食物を知る
(工 101 講義室) 世話人:浅利裕伸(株式会社 長大)

9 月 20 日(月) 13:00~14:45

- O1 会場 F-19 「統合的な野生動物管理システムの構築」へ向けて
(工 100 講義室) 世話人:斉藤正恵・小池伸介・梶 光一(東京農工大学)
- O2 会場 F-20 ニホンジカが生物多様性に与えるインパクト
(応 101 講義室) ~不可逆的影響の現状とその取り組み~
世話人:荒木良太(自然研)・横山典子(WMO 関西)
- O3 会場 F-21 Mammal Study へ投稿しようー世界へ発信するあなたの哺乳類研究
(応 102 講義室) 世話人:増田隆一(Mammal Study 編集委員長/北海道大学大学院理学研究院)
- O4 会場 F-22 哺乳類学者・進化学者 徳田御稔の足跡
(応 103 講義室) 世話人:大館智氏(北海道大学低温科学研究所)
- O5 会場 F-23 ニホンザル個体群管理の現場と今後の課題
(工 102 講義室) 世話人:渡邊邦夫(京大霊長研)・常田邦彦(自然環境研)・江成広斗(宇都宮大農)
- O6 会場 F-24 増補版食虫類の自然史 10・日本産食虫類のレッドリスト再点検
(工 101 講義室) 世話人:横畑泰志(富山大院・理工)・川田伸一郎(科博)・森部絢嗣(朝日大・歯)

9 月 20 日(月) 15:00~16:45

- O1 会場 F-25 インタープリテーションは保全の現場で役に立つのか?
(工 100 講義室) ー専門家と現場のコミュニケーションを中心にー
世話人:富田涼都(静岡大学)・関根聡子(ネイチャーガイド)
- O2 会場 F-26 木に縁りて魚を求む ー「失敗事例」から学ぶケモノ対策
(応 101 講義室) 世話人:小寺祐二・江成広斗(宇都宮大学農学部附属里山科学センター)
- O3 会場 F-27 琵琶湖におけるカワウ問題
(応 102 講義室) 世話人:須藤明子(株式会社イーグレット・オフィス)
- O4 会場 F-28 野生動物学実習の現状と改善に関する集会
(応 103 講義室) 世話人:高槻成紀(麻布大学)・安藤元一(東京農業大学)

F-01 クマ類の個体数を推定する：DNA マーカ个体識別の有効性と課題

世話人：米田政明(自然環境研究センター)・間野 勉(北海道総合研究機構)

クマ類は日本の狩猟獣の中でもその生物学的特性、被害防除への社会的要請、および地域個体群保全のため保護管理に特に注意が必要な種です。保護管理では、生息数あるいはそのトレンドに基づく捕獲数管理が必要です。クマ類の個体数推定のため、ヘア・トラップ法として、採取した体毛の DNA マーカに基づく個体識別・個体数推定法が導入されています。ヘア・トラップ法は、バレルトラップに比べ、より多くのトラップを広範囲に設置できる利点があります。また、DNA は永久マーカとなり、非侵襲的方法で大量の試料を採取できます。このため、ヘア・トラップ法は、他の方法に比べ単位面積当たりの個体識別精度は高いと考えられます。環境研究総合推進費(S2-10)による「クマ類の個体数推定法の開発に関する研究」では、ヘア・トラップ法の標準化、個体数推定精度の向上を目指しています。DNA マーカによる個体識別は、潜在的にすべての種の個体数推定や移動分散研究に適用可能です。しかし、ジェノタイプングエラーを含め、多くの課題があります。クマ類の個体群モニタリングとして 2009 年度哺乳類学会で行った自由集会の発展型として、2010 年度はヘア・トラップ法と DNA マーカ个体識別に焦点をあてます。

1. 「ヘア・トラップ調査の設計と実施：どれだけの調査規模が必要か」 米田政明(自然研)
2. 「DNA マーカによる個体識別法(1):分析成功率に何が影響するか」 近藤麻実(岐阜大)、山内貴義(岩手研環境保健研究センター)
3. 「DNA マーカによる個体識別法(2):精度管理をどうするか」 鶴野レイナ(慶応大)、玉手英利(山形大)、釣賀一二三(北海道総合研究機構)、湯浅 卓(野生動物保護管理事務所)
4. 「食跡からの DNA 採取：加害个体判別の課題」 齋藤正恵(農工大)、青井俊樹(岩手大)
5. 「空間明示型 Capture-Recapture モデル：個体密度はどのように計算すべきか」 深澤圭太(自然研)、太田海香(横浜国大)、松田裕之(横浜国大)

F-02 野生生物保護学会将来構想検討会企画自由集会

野生生物保護管理の現場を動かす力 ～徹底調査からコーディネートまで～

世話人：吉田正人(筑波大)・横山真弓・鈴木克哉(兵庫県森林動物研究センター)

日時：2010年9月18日 9:30～11:10 岐阜大学 101 講義室(定員 120人)

今、野生生物と人との間に大きな軋轢が生じています。農林業被害の低減、環境保全、野生動物の保全—この3つの複雑な問題の解決のため、現場では被害者、行政、市民など、様々な立場の人々がこの課題に取り組んでいます。研究者にはこの現場を動かす力として、客観的なデータに基づく適切な方針決定と問題を取り除くための手法の提示、さらに人々をコーディネートする力が求められます。本自由集会では、徹底的な調査から得られるデータをもとに合意を図り、現場を動かしている演者 3 名から話題提供いただき、現場を動かす秘訣を議論したいと思います。

本自由集会は野生生物保護学会将来構想検討会が提案した、今後 10 年間で目指すべき3つの方向性の一つである「研究者と実務者が集い、自然科学と社会科学にまたがる学際的な研究発表と情報交流の場を創出する」を実現するために企画しました。

1. カワウ問題とその対策 須藤明子((株)イーグレット・オフィス)
2. アザラシの保護管理(被害と対策) 小林万里(東京農業大学・生物産業・アクアバイオ)
3. ニホンザル問題と被害管理 岸本真弓((株)野生動物保護管理事務所)

F-03 哺乳類種多様性アジア研究者ネットワーク

世話人: 本川雅治(京都大学総合博物館)・新宅勇太(京都大学・院理・動物)

Asian Researchers' Network for Mammal Species Diversity

Organized by Masaharu Motokawa (Kyoto Univ. Museum) and Yuta Shintaku (Dept. Zool., Kyoto Univ.)

This meeting is aimed at building the Asian researchers' network in the field of mammal species diversity, that field has many problems existed over the several countries, such as taxonomy, systematics, phylogeny, phylogeography, zoogeography, and conservation. In this meeting, we discuss among Asian mammal researchers from Japan, China, Taiwan, Korea, Russia, and Vietnam, concerning to 1. current available information in Asia; 2. existed problems in species diversity; 3. the way to resolve those problems through multi-country collaborations. (Talk No. 1: 5 minutes; Nos. 2-6: 15 minutes each)

1. Why Asian researchers' network is needed? Masaharu MOTOKAWA (Kyoto Univ. Museum, Japan)
 2. *Rhinolophus* bat systematics and importance of Asian researchers' network
Yi WU (Guangzhou Univ., China)*
 3. Taxonomy and phylogeography of northeast Asian mammals
Alexei KRYUKOV (Inst. Biol. Soil Sci., Far East Branch RAS, Russia)
 4. Current status of small mammal systematics in Vietnam
Nguyen Truong SON (Inst. Ecol. Biol. Res., VAST, Vietnam)
 5. Conservation genetics of wild mammals in Korea. Hang LEE (Seoul Natl Univ., Korea)
 6. Conservation of mammals in Hainan Island. Yuchun LI (Shandong Univ. at Weihai, China)*
- Discussion Commentator: Liang-Kong LIN (Tunghai Univ., Taiwan)

*Participations of Chinese researchers are supported by a joint grant of JSPS and NSFC (30811140092).

F-04 新石垣空港建設が希少コウモリ類に及ぼす影響

世話人: 石井信夫(東京女子大学)・佐野 明(三重県四日市農林商工環境事務所)

沖縄県石垣島東部のカラ・カルスト地域において、新石垣空港の建設が進められている。建設域は希少コウモリ類3種(ヤエヤマコキクガシラコウモリ、カグラコウモリ、リュウキュウユビナガコウモリ)の重要な生息地となっているが、空港建設(工事および供用)により、これらが利用するいくつかの洞窟が破壊され、周辺環境は大きく改変される。カラ・カルスト地域学術調査委員会による独自調査や工事の進捗によって、それまでの沖縄県による調査では知られていなかったいくつかの事実が明らかになり、空港建設の進行によるコウモリ類への影響が懸念されている。そのため本学会の「哺乳類保護管理専門委員会」は2008年9月に沖縄県等に一部工事延期の要望を含む要望書を提出したが、工事は予定通り進められている。今後の学会としての対応を考える上でも、データに基づき、新石垣空港建設が希少コウモリ類に及ぼす影響の内容とその評価について十分な議論を行うことが重要である。本自由集会では、以下のような話題提供をしてもらい、議論したいと考えている。

1. 「趣旨説明とこれまでの経緯」 石井信夫(哺乳類保護管理専門委員会)
2. 「新石垣空港建設域におけるコウモリ類の生息状況とその変化」 比嘉榮三郎(沖縄県)
3. 「空港建設がコウモリ類に及ぼす影響とその評価」
前田喜四雄(新石垣空港小型コウモリ類検討委員会委員、前 奈良教育大学)
4. 「合同調査拒否の経緯、現状評価に関わる個体数調査の問題点及び空港建設によるコウモリ類への影響」 船越公威(カラ・カルスト地域学術調査委員会代表、鹿児島国際大学)
5. 「総合討論」

F-05 「管理主義から生態系主義へ～カワウソ・オオカミの復活」 日本オオカミ協会(JWA)2010 自由集会

世話人:井上 剛(日本オオカミ協会)

2005年9月、34年ぶりに日本の空にコウノトリが舞った。わが国における絶滅種復活の記念すべき第1歩から5年、これに続きトキの放鳥が実現し、日本においても絶滅種の復活(再導入)の取組がはじまった。

一方、野生動物の生態系、農林業における被害対策に関しては、相変わらず個体群管理主義から抜け出せぬ状況が続いている。

ソロソ管理主義から、生態系本来の仕組みを考え直す“生態系主義”へのシフトが必要ではないだろうか？

そこで本集会では、明治以降、日本で絶滅した唯2種の哺乳類であるカワウソとオオカミを題材にし、生態系における役割と復活の可能性について考える場としたい。

今年 COP10 日本開催の記念すべき年に当たり、生物多様性の保全のためにも“管理主義から転換し、生態系の機能復元が必要である”ことをアピールする好機と捉え、本集会を企画した。

多くのみなさまのご参加をお待ちしています。

話題提供(予定)

1. はじめに、「発想の転換の必要性:個体群管理主義から生態系主義へ」井上 剛(JWA)
2. 「JWA オオカミ復活アンケート結果を読み解く！」南部 成美(JWA)
3. 「シカ増加と地域社会の衰退～南アルプスの狩猟者の動向から」朝倉 裕(JWA)
4. 「IUCN の再導入ガイドラインから見たカワウソの再導入の可能性」安藤 元一(東京農大・野生動物)
5. 総合討論

F-06 トゲネズミ研究の最近(2)

世話人:城ヶ原貴通(岡山理科・理)・山田文雄(森林総研)

オキナワトゲネズミの再発見を機に開催された 2008 年度大会におけるトゲネズミ属を主題とした自由集会では、本属の生態学的・染色体学的特異性が報告された。とりわけ本属の染色体構造が分布する島嶼ごとに異なっていた点は特筆に値する。即ち、アマミトゲネズミ・トクノシマトゲネズミの性染色体は *SRY* 遺伝子を欠いた XO 型を呈し、雌雄決定機構に多くの謎を含んでいる事が指摘された。トゲネズミの研究はその後も生息状況調査を中心に染色体・性決定メカニズム・保全技術など広範囲に展開をみせており、それに関わる研究者の数も着実に増加している。しかし、トゲネズミ属の保護・保全研究は緒に就いたばかりであり、生息状況のより詳細な調査をはじめ飼育繁殖や資源保存に向けた各種技術の確立など、解決すべき問題は山積している。日本固有種であるトゲネズミ属に関連した諸問題を検討することは、本属の保全のみならず広く絶滅に瀕した哺乳類の保全を考える上で有効な基礎資料を提供するケーススタディと捉えることができる。本自由集会がトゲネズミ属の研究展開や保全目標を明確に描くための議論の場となればと考える。

1. 「トゲネズミ属の現状(特に生息状況について)」山田文雄(森林総研)
2. 「トゲネズミの染色体進化と遺伝的多様性」村田知慧、黒岩麻里(北大院・生命科学院)
3. 「アマミトゲネズミの飼育とその現状」城ヶ原貴通(岡山理科・理)
4. 「齧歯類生殖細胞保存研究の現状」越本知大(宮崎大・フロンティア)
5. 「クローン技術によるトゲネズミの個体再生をめざして」三谷匡(近畿大・先端技術)

F-07 ニッポンのハンターを絶滅から救え！

世話人:伊吾田宏正(酪農学園大学)・松浦友紀子(森林総合研究所北海道支所)

野生動物による被害が増加する中、現場で個体数管理を担っているハンターの数は年々減少している。1970年度のピーク時には全国で53万人いた狩猟者登録数は、2006年度には7割減の16万人まで落ち込んだ。また、高齢化も深刻である。このままではハンターは減る一方であり、“絶滅”が危惧される。シカやクマ、海獣類といった大型の野生動物管理においては、銃器を用いた捕獲が不可欠であり、ハンター数の減少は野生動物管理をすすめる上で大きな問題である。捕獲専門家による管理が目される一方で、地元のハンターたちの貢献もなくてはならない。

そこで本自由集会では、まず研究者兼ハンターとして野生動物管理に取り組んでいる以下の方々から、現場の状況を紹介していただく。その上で、海外の事例も参考にしながら、「どうしたら質の高い若手ハンターを増やせるか」について、今後の野生動物管理を担っていく学生及び若手研究者たちと意見交換を行いたい。

1. 趣旨説明「ハンター、狩猟、そして野生動物管理」伊吾田宏正(酪農学園大学)
2. 「肉食系鹿ハンターの憂鬱:なぜハンターたちは銃をおくのか」松浦友紀子(森林総合研究所)
3. 「地域密着系ハンターの悩み:ヒグマ対策の最前線」早稲田宏一(NPO・EnVision 環境保全事務所)
4. 「裏山系ハンターの日常:生活の中のイノシシ」松橋珠子(岐阜県畜産研究所)
5. 「海獣系ハンターの養成にむけて:いま海で何が起きているのか」小林万里(東京農業大学)
6. 「サークル系ハンター組織の野望;“狩り部”の可能性」瀬戸隆之(東京農工大学)
7. 総合討論「どうしたら質の高い若手ハンターを増やせるか？」

コメント&北欧の事例紹介:上野真由美(北海道環境科学研究センター)

F-08 ツキノワグマの土地利用は食物資源の変化にどのように対応しているのか？

世話人:山崎晃司(茨城県自然博物館)・小池伸介(東京農工大学大学院)

ツキノワグマ(以下、クマ)にとって、秋は冬眠の前の栄養蓄積をする時期であるが、その季節に食物不足になることで、秋の出没が発生すると考えられている。しかしながら、これまでクマの土地利用と食物資源量の変化の関係については、定量的な検証が行なわれていない。世話人らは、東京都奥多摩地域および栃木県の日光・足尾地域において、GPSテレメトリー首輪を用いたクマの行動調査、クマの利用する食物資源量の季節的・年次的変化、生息地の食物資源量の定量的な評価を試みてきている。今回は、その成果の一部と途中経過について報告したい。

話題提供者(予定):小坂井 千夏(東京農工大学大学院・連農)

根本 唯(自然環境研究センター)

梅村 佳寛(東京農工大学大学院・農学研究院)

中島 亜美(東京農工大学大学院・連農)

有本 勲(東京農工大学大学院・連農)

F-09 「野生生物と交通」に関する話題～事例紹介から次のステップへ

世話人: 浅利裕伸(株式会社 長大)・鹿野たか嶺(社団法人 北海道開発技術センター)・
野呂美紗子(社団法人 北海道開発技術センター)・山田芳樹(株式会社 ドーコン)

日本の交通網は年々発達しており、これにともなって「野生生物と交通」に関わる問題も生じている。道路は、動植物の生息(生育)環境の縮小・消失・分断化をもたらす。また、ロードキルやレールキルが生じることで、生物への影響だけでなく人身事故などの問題があげられる。これらの問題を解決するために、生息地保全や移動経路確保といった保全対策も検討されてきているが、十分な研究は行なわれていない。この要因はいくつかあると思われるが、研究の必要性が十分に周知されていないことも要因の一つであると思われる。北海道においては「野生生物と交通」研究発表会が毎年開催されており、北海道内の研究事例や保全事例が紹介されているが、全国的な研究事例の発表は少ない。そこで、われわれは、第14回野生生物保護学会大会において、「野生生物と交通」に関する研究事例を報告し、周知を図った。

今回の自由集会においては、いくつかの研究事例を紹介するとともに、今後の課題点について意見を出し合い、問題解決に向けてさらなる一歩を踏み出すことを目的とする。このような研究を知らない方、研究を行なっている方、関心をお持ちの方、たくさんの参加をお待ちしています。

以下のほか、1～2題の発表と、次のステップに関する意見交換の時間を設けます。

1. 「野生生物と交通に関するこれまでの取り組み～「野生生物と交通」研究発表会からの事例報告」
鹿野たか嶺・野呂美紗子(社団法人 北海道開発技術センター)
2. 「ニホンジカとの列車衝突事故防止に関する研究—ライオン排泄物由来忌避剤の可能性」
大橋真吾(岩手連大 農学研究科)
3. 「森林を横断する道路が無脊椎動物の移動に与える影響」 山田芳樹(株式会社 ドーコン)

F-10 鳥獣で喰う — 研究を職業とするための錬金術 —

世話人: 平田滋樹(長崎県, 前鳥取県)・小寺祐二(宇都宮大学)

近年、生物多様性や鳥獣被害対策といったキーワードと共に、野生生物保護管理への関心が高まっている。そして、適正な保護管理を行うためには、対象となる動物の生態や生息環境に加え、人間が生態系に及ぼす影響についても考慮する必要がある。そのため、動物側の情報を得るための生態学や行動学、また人間側の課題として社会学や人類学など、大学等の研究機関において多角的なアプローチが試みられている。

しかしながら、野生生物関連の調査・研究に携わっていた人材が、その知識や経験を活かせる職を得ることは多くない。このことは、野生生物保護管理に関わる政策立案や施策を行う立場の行政等において、専門的な知識を有する人材が不足しがちにあるといった問題にも繋がっている。

本集会ではこれらの点を踏まえて、調査対象や研究分野、業種等が異なる発表者から、過去の研究や現職での活動、両者の関連性や相違点について体験談や経験則に基づく話題提供を行う。また総合討論において、野生生物保護管理に関わる研究機関や行政機関の連携や今後の課題などについて問題提起や課題解決に向けた議論を行いたい。

1. 「おこぼれで喰う」 平田 滋樹(長崎県農林部 農政課, 前 鳥取県農林水産部 生産振興課)
2. 「過去の遺産で喰う」 姉崎 智子(群馬県立自然史博物館)
3. 「狩猟で喰う」 上田 剛平(兵庫県但馬県民局 豊岡農林水産振興事務所 森林林業課)
4. 「サルで喰う」 山田 彩((独)農研機構 近畿中国四国農業研究センター 鳥獣害研究チーム)
5. 「人を喰う」 小寺 祐二(宇都宮大学農学部附属里山科学センター)
6. 総合討論

F-11 東北地方の野生動物調査体制の構築を目指して

世話人: 玉手英利(山形大学理学部)・東英生(哺乳類研究所準備室)

東北地方南部ではニホンザルやツキノワグマの分布域が連続しているが、生息調査や保護管理は各県単位で行われてきたため、広域的な生息状況に関する情報は不足していた。しかし、最近ではテレメトリーや遺伝子分析などによって、行政単位を超えた動物の移動・分散に関する情報が蓄積しつつある。本集会では、このような調査手法を用いて明らかになった、東北南部における県境を越えた個体の移動に関する事例報告すると共に、調査データを蓄積・共有する体制の構築について意見交換を行う予定である。

今年度、マーキング等により確認されたツキノワグマについても事例報告を行う予定です。

1. 「ニホンザルの山形県と福島県の県境を跨ぐ群れの遊動域についてGPSを利用したデータの解析」
(季節移動を行う群れの追跡、毎年春、15kmを移動)

今野文治(新ふくしま農協)

2. 「ニホンザルの山形県米沢市から岩手県山田町の300kmの移動の確認」
(推定14歳の♂の移動・発信機から)

東英生(哺乳類研究所準備室)

3. 「県境を行き来するニホンザル個体群の管理をどうするか？」

宇野壮春(宮城・野生動物保護管理センター)

4. 「山形のシカとイノシシはどこから来たのか？」

玉手英利(山形大学理学部)

F-12 標本とその二次資料, 合わせて見るとおもしろい

世話人: 栗原 望(国立科学博物館動物研究部)

一次資料と二次資料という区別は、状況や研究対象によって異なるが、ここではいわゆる自然史科学系での二次資料、つまり動物標本に付随する諸々の記録を二次資料とする。標本の産地情報や標本採集者、標本のスケッチ、その標本にまつわる話などあらゆるものが二次資料となる。一次資料と二次資料は互いに補完し合う関係にあるが、時として二次資料単独でも興味深いことが分かることもある。しかし、一次資料と比べると二次資料となる情報は蓄積が少なく、散逸しているのが現状である。そこで、今一度二次資料に注目し、「二次資料は面白い！」ということを認識し合える場を作りたい。さらに、将来に向けて二次資料をどう保存していけばよいのか議論したい。

標本ラベルからわかること

川田伸一郎(国立科学博物館動物研究部)

江戸時代後期に描かれた熊本のヤマネの産地の特定

安田雅俊(森林総合研究所九州支所)

一次資料と二次資料から生み出される価値 ―(財)日本モンキーセンターでの事例―

小林秀司(岡山理科大学)

博物館資料の周辺情報のデジタル・アーカイブ化―管理者にも利用者にも使いやすい Web データベースの構築を目指して―

有田寛之(国立科学博物館事業推進部)

F-13 サンプリングデザインとデータ解析～具体的研究事例に基づくオープンディスカッション

世話人: 清田雅史(遠洋水研)・高橋紀夫(遠洋水研)・金子弥生(東京農工大)

サンプリングとデータ解析の重要性について考える場として 2008 年に本自由集会を企画したところ、多くの方々にお集まりいただき、データ解析に高い関心が寄せられていることを確認しました。それと同時に、哺乳類研究では偏りや反復のないランダムサンプリングは難しく教科書的な統計解析を適用しにくいこと、解析ソフトの初歩的な使い方から高度な解析法の応用まで様々なレベルの問題意識があること、哺乳類研究に関する数理解析の専門家が不足していることも実感し、本集会の進め方と焦点の絞り方にむずかしさも感じました。

そこで、過去1年以上にわたり、東京農工大の学生諸氏と近隣の研究者が集まって勉強会を開催し、野生生物研究とデータ解析について検討を重ねました。『データをいかに集め、料理するか?』という問いかけは全ての研究者に共通することから、実際の調査や解析を通じて研究者が抱いた問題点と、それに対し他の研究者が寄せたアイデア、両者の議論を通じて得られた改善点(必ずしも改善ばかりではないかもしれませんが…)、こうした具体的事例を紹介してオープンに議論することにより、幅広い方々が有益なヒントを得られるのではないかと考えました。今回は我々の勉強会から3つの話題を紹介します。

解析経験の多寡に関係なく、自由に質問や意見を交わすことのできる相互刺激の場にしたいと願っていますので、お気軽にご来場ください。

1. 「分散分析・回帰・共分散分析入門ーラッコの相対成長を例として」 清田雅史(遠洋水研)
2. 「ツキノワグマの食物資源としてのミズナラ堅果の成熟フェノロジー解析
ー 個体差を考慮し様々な応答変数を扱う GLM 解析の事例」 中島亜美(東京農工大)
3. 「高密度 GPS データの解析からクマの採食行動を復元できるか?」 有本 勳(東京農工大)

F-14 生物多様性保全に向けたニホンジカの個体数管理

世話人: 濱崎伸一郎(WMO関西)・小泉透(森林総研)・山内貴義(岩手県環境センター)

近年のシカの分布拡大と個体数増大は、農林業被害の増加にとどまらず、生物多様性保全の上でも各地で大きな問題となっている。特に、これまでシカが分布していなかった高山・亜高山帯などでは、氷河期からの遺存種や厳しい自然環境に適応した希少な固有種を含め、シカの採食圧に耐性の低い植物の急激な減少が見られるほか、裸地化した土壌の流出など生物多様性保全の上で大きな問題となっている。このような状況に対して各地で様々な対策が試行されているが、地形や気象などの自然条件、自然公園法などの法的制限などの問題もあって対策の確立には課題も多く残されている。

シカの個体数管理も対策の柱の一つであるが、他の対策と同様に、その手法は未だ検討段階といわざるを得ず、地域特性に合った効果的な捕獲手法の確立が求められている。本自由集会では、これまで取り組まれている各地の事例を紹介していただき、個体数管理の目標、実施されている捕獲方法の課題など各地の情報を共有するとともに、シカの行動特性を考慮した効果的な捕獲手法の確立に向け課題を整理したい。

1. 「高山・亜高山帯におけるシカの行動特性と個体数管理における留意点」 泉山茂之(信州大学)
2. 「日本版シャープシューティングの可能性と課題」 鈴木正嗣(岐阜大学)
3. 「知床におけるシカ個体数管理の現状と課題」 山中正実(知床財団)
4. 「大台ヶ原におけるシカ個体数管理の現状と課題」 黒崎敏文(自然環境研究センター)
5. 「尾瀬におけるシカ個体数管理の取り組みと課題」 小金澤正昭(宇都宮大学)

F-15 かたちの学校 15

世話人: 遠藤秀紀 (東京大学・総合研究博物館)

15回目を迎えることになったかたちの学校である。実は今回は、かたちの議論のみに集約せず、ベトナムやインドシナの調査の未来を考える機会にしてみたいと思う。思えば世話人は二十年ほど前の南タイの調査以来、かの地でたくさんの人々と触れ合い、恥ずかしながらも幾ばくかの足跡を残してきた。今回は前線でいままさにともに戦っている二人の演者から今日的な調査の話題をいただき、議論の俎にのせてみたい。

1. Nguyen Truong Son (Institute of Ecology and Biological Resources, VIETNAM)

ベトナムにおける国立生態生物資源研究所と日本人研究者による小型哺乳類の共同研究
Small mammal research collaboration in Vietnam between IEBR and Japanese Researcher

2. 押田龍夫 (帯広畜産大学)

ハイガシラリスとベトナムリスの系統関係: メコン川による地理的隔離はタイワンリス属の種分化にどのように影響したか?

Phylogenetic relationship between *Callosciurus caniceps* and *C. inornatus* (Rodentia, Sciuridae): implication for zoogeographical isolation by the Mekong River

F-16 ハクビシンの多様性科学

世話人: 増田隆一 (北海道大学 大学院理学研究院 多様性生物学分野)

日本のハクビシン(*Paguma larvata*)の在来種説-外来種説は古くから議論されてきた。最近の分子系統学的解析により、日本ハクビシンの起源が少なくとも台湾にあることが明らかになってきた。ハクビシンは食肉目ジャコウネコ科(Carnivora, Viverridae)に分類され、東南アジアから南アジアにかけて広く分布している。その分布が日本で確認された時期は比較的新しく、また分布情報も本州において単発的であったため、日本のハクビシンはしばしば外来種として扱われてきたことも事実である。そのため、これまで日本では、ハクビシンが研究対象にされるのが少なかったように思われる。さらに、ジャコウネコ科に分類される約 35 種は日本以外のアジアやアフリカに自然分布するため、ジャコウネコ科自体の研究が日本では進展していないのが現状である。

そこで本自由集会では、謎の多いハクビシンにスポットを当て、その生物学に取り組んでいる研究者に最新の成果を紹介していただくことを企画した。ここでは被害対策などの外来種問題は中心的な話題にしないで、ハクビシンの生物学的特徴および今後なすべき研究課題について自由に議論したい。

話題提供者は以下の 5 名(1 名につき講演時間 15 分程)の予定である。

1. 「日本ハクビシンの起源: 分子系統からたどる」 増田隆一 (北海道大学 大学院理学研究院)
2. 「ハクビシン集団の遺伝的多様性」 井上 友 (北海道大学 大学院理学院)
3. 「ハクビシン舌乳頭の微細構造」 江村正一 (岐阜大学 医学部)
4. 「ハクビシンの舌骨装置について」 高田靖司 (愛知学院大学 歯学部)
5. 「日本でハクビシンの生態研究をすることは意味がないのか?」 金子弥生 (東京農工大学)
6. 「総合討論」

F-17 ゼニガタアザラシの被害をめぐって：地域社会・水産経済の視点から

世話人：和田一雄（海獣談話会）

1. 「ゼニガタアザラシ研究の到達点と課題」 和田一雄（海獣談話会）
2. 「地域社会、特に学校教育の立場から」 小林由美（北大水産学研究所資源生物学）
3. 「水産経済、特にえりも町がもつ問題点を中心に」 廣吉勝治（北大名誉教授水産経済）

和田は、ゼニガタの保護運動史を紹介する。開始期である、1973年に始まった保護活動はゼニガタの天然記念物指定を目指した。海獣談話会はその生態、被害の実態調査を行った。1982年のゼニ研設立は発展期Ⅰを導いた。生態、被害調査は1982-83年を含んで本格化し、1985年のミニ国際シンポ、1986年の論文集出版の成果に至った。これを機会に文化財指定から漁業との共存に方針を代えた。発展期Ⅱはゼニガタのウォッチングツアー開始、エリモシールクラブ設立などで共存の幕開けである。

小林は、浜中での小学校の先生・生徒を対象にしたゼニガタ普及活動の紹介をする。小林を中心にしたゼニ研がゼニガタとはどんな動物で、漁業にどんな被害を与えており、どんな対策が採られているのかを丁寧に説明したのだった。小学生にどのようにしたら、興味を持ってもらえるのか、教材化するにはどうしたらいいかは先生から教わることで問題の解決を図った。やがては大人になる小学生にゼニガタを知ってもらうことは普及活動としてきわめて重要な一面である。

廣吉は、えりも漁協の取り組みを中心に地元漁協の抱える経済的問題を中心に取り上げる。最近、明らかに襟裳岬のゼニガタ個体群が増加していることを受けて、漁業者はしかるべき数は駆除してもいいのではないかと考える。駆除して確かに被害が軽減されるめどがあるなら、取り組めるが、現在それは明確ではない。被害を受ける定置網ごとに被害額を明らかにしてそれに見合うサケ取量を保証する、漁協全体で受けるサケ被害額にあたる数量分をサケの孵化放流量に上乗せする、各定置網の被害額を保険で保証する、被害サケだけでなく、その他のサケを加工して販売する、など多面的に検討されている。

F-18 滑空性哺乳類の移・食・住－滑空と採食物を知る

世話人：浅利裕伸（株式会社 長大）

日本における滑空性哺乳類の研究は、分布・生態・形態などの分野で行なわれており、1997年の哺乳類学会大会自由集会においては、リス・ムササビネットワークの第一回集会として今後の研究の必要性が話し合われている。しかし、その後の集会は十分に行なわれず、10年もの間各研究者や団体が各々の活動や交流によって情報を得ている状況である。さらに、滑空性哺乳類以外を研究している方の多くにとっては、論文を検索し手に入れなくては必要な情報が得られないことも多い。

滑空性哺乳類における近年の研究は、研究手法の進歩・各研究者の地道な努力・地域での活動などによって、各個人および団体の研究が少しずつであるが蓄積されてきている。このような研究事例を発表する場をもつことによって、情報を共有するとともに、滑空性哺乳類研究の現状を広く周知することを目指す必要がある。さらに、情報の共有は、今後の研究の発展および若手研究者の育成にも役立つと考えられる。

今回の自由集会では、滑空性哺乳類を対象とした近年の研究事例を報告し、滑空性哺乳類の生態および研究の現状について理解を深めることを目的とする。

1. 「なぜ滑空性哺乳類を研究するのか：近年における研究の傾向」
安藤元一（東農大）・浅利裕伸（株式会社 長大）
2. 「滑空性哺乳類の移動について－タイリクモモンガをメインに－」
鈴木圭（岩手連大 農学研究科）・浅利裕伸（株式会社 長大）・柳川 久（帯畜大）
3. 「何を食べているのか～採食物リスト最新版」 浅利裕伸（株式会社 長大）
4. 「地元で実践 福島県での事例」 岩崎雄輔（福島県立会津高等学校）

F-19 「統合的な野生動物管理システムの構築」へ向けて

世話人: 斉藤正恵・小池伸介・梶光一(東京農工大学)

生物多様性の宝庫であった里山では、今日過疎高齢化による撤退と耕作放棄地の増加狩猟人口の減少によって、野生動物の分布拡大や生息数の激増が生じ、農林業被害の激化や生態系に負の影響が現れている。これらの問題を解決するために、2009年度より東京農工大学では、宇都宮大学および栃木県と連携して、社会科学と生態学の融合による統合的なアプローチとしての野生動物管理地システムの構築プロジェクトを開始した。

本プロジェクトでは、社会と環境の相互の関係を知る枠組みとして知られるDPSIRスキームを用いることにより、野生動物の増加と分布拡大がもたらす農林業被害や生態系への悪影響について、人為的・自然的要因を突き止め、被害を予防あるいは軽減する対策を提言していきたいと考えている。今回は、モデル地区として栃木県を対象としたプロジェクト研究の課題や内容について、その経過を報告する。

話題提供者(予定): 梶 光一(東京農工大学・農)
大橋 春香(東京農工大学・フロンティア農)
桑原 考史(東京農工大学・フロンティア農)
斉藤 正恵(東京農工大学・フロンティア農)
弘重 譲(東京農工大学・フロンティア農)
堀江 玲子(宇都宮大学・農)

F-20 ニホンジカが生物多様性に与えるインパクト～不可逆的影響の現状とその取り組み～

世話人: 荒木良太(自然研)・横山典子(WMO 関西)

ニホンジカ(以下、シカ)による生態系への影響はシカ生息地のほとんどで確認されており、これまでも多くの学会で議論されてきた。また、ほぼ人為と考えられている近年の温暖化により、高山・亜高山帯など有史以来シカが生息していなかった地域へ分布を拡大し、その影響が不可逆的なものになることが危惧されている。

シカが及ぼす影響は植生のみならず、動物群等多岐にわたるため、単独の生物群を対象にした組織での議論には限界がある。そこで本自由集会では、シカが自然植生に与える影響とその対策について各地で取り組んでこられた研究者を招き、①高標高域を中心とした自然公園等における、シカの生物多様性に与えるインパクトの現況と対策に関する情報を共有すること、②多様性保全の観点から、シカのインパクトの重大性を認識し、さらに早期に対策に取り組む必要性の認識を共有すること、③植物、動物それぞれの専門家がこの問題について、相互に議論、協力しながら対策を進めるきっかけとすること、を目的として『不可逆的な影響』をキーワードに議論を進めたい。

1. 「森林生態系への不可逆的影響とその原因の整理—大台ヶ原の事例」 横田岳人(龍谷大学)
2. 「シカ密度に対応した植生指標と植生回復の可能性—知床岬、洞爺湖中島等の事例—」 宮木雅美(酪農学園大学)
3. 「植生保護柵の効果と影響の整理—丹沢の事例—」 田村 淳(神奈川県自然環境保全センター)
4. 「南アルプス地域におけるシカの影響とその対策」 鵜飼一博(南ア・ボランティアネット)

F-21 Mammal Study へ投稿しよう〜世界へ発信するあなたの哺乳類研究

世話人: 増田隆一 (Mammal Study 編集委員長 / 北海道大学大学院理学研究院)

本学会英文誌 Mammal Study は、すでに周知されているように SCIE に登録され (Mammal Study Vol. 34, No. 4 の巻頭参照)、国際的にアクセスされるジャーナルとなった。2012 年からは、インパクトファクターを取得することが決まっている。このように、身近な Mammal Study が、あなたと世界の哺乳類研究者の間を直接結ぶ役割を果たしている。さらに 2009 年から、優秀な掲載論文には Mammal Study 論文賞 (副賞つき) が授与されることとなった。あなたが取り組んでいる哺乳類研究の成果を世界へ発信するため、是非、Mammal Study へ投稿していただきたい。

本自由集会では、まず Mammal Study への投稿方法を紹介する。初めて投稿する方やまだ投稿に慣れていないと考えている方にも、投稿から論文掲載までの道筋をわかりやすく紹介する。さらに、編集委員会は Mammal Study が会員にとってよりよい研究発表の場になることを願っており、編集に関する質問やご希望を自由に話題にしていいただきたい。特に、今年は現体制編集委員会の最後の年でもあり、この 3 年間の経験に基づいた討論も行いたい。

F-22 哺乳類学者・進化学者 徳田御稔の足跡

世話人: 大館智氏 (北海道大学低温科学研究所)

徳田御稔 (とくだ みとし) は第二次大戦前後に活躍した動物学者、進化学者である。彼は東アジアの齧歯類分類の発展に寄与し、また生物地理学、進化学に関する議論を行い、哺乳類学者のみならず進化学者に大きな影響を与えた。戦後の哺乳類学研究の要石である「哺乳類科学」の創刊初期には、徳田が先頭になって論陣を張ってきたことから哺乳類研究への影響の大きさは分かる。このように徳田は日本の哺乳類学、特に小型哺乳類の発展に果たした役割は大きい。一方、戦後に徳田の著した一連の進化関連の著作は今西錦司の進化論とともに日本の進化研究に多大な影響を及ぼした。しかし、彼のラマルクの進化論は今西進化論と同様、現在の日本の進化学においては批判的に評価されている。このように日本の哺乳類学・進化学研究に徳田が与えた影響には正と負の側面があるといえる。徳田の没後、四半世紀以上が経過し、直接論議をされた人びとも定年を迎えられたか、あるいは鬼籍にはいられている。従って今こそ、彼の業績を正しく評価すべき最後のチャンスであると考え、この集会を企画した。今回の集会には特に「徳田御稔」という名前すら聞いたことのない若手の参加を望みたい。総括と論議こそが学問の発展の為には必要であり、これが新たな流れにつながるのというのを実感していただきたい。

1. 「導入。趣旨説明。徳田御稔って誰？」 大館智氏 (北大低温研) 5 分
2. 「徳田御稔の個人史—経歴と業績—」 金子之史 (元香川大) 20 分
3. 「徳田御稔と齧歯類分類」 岩佐真宏 (日大生物資源科学) 20 分
4. 「徳田御稔と生物地理学」 本川雅治 (京大総合博物館) 20 分
5. 「徳田御稔の分類と進化論」 三中信宏 (農環研・東大農学生命) 20 分
6. 「総合討論」 以上の演者+阿部永 (元北大農学部)。20 分。司会、大館。

F-23 ニホンザル個体群管理の現場と今後の課題

世話人: 渡邊邦夫(京大霊長研)・常田邦彦(自然環境研)・江成広斗(宇都宮大農)

昨年度は「ニホンザルの個体群管理－何から始めるべきか」と題して、野生ニホンザル個体群管理に関わる基本的な問題点の洗い出しを行った。具体的には、個体群管理にかかわるモニタリング計画そのもののあり方にかかわる問題点とその方法、そしてニホンザル個体群管理の手法として広く行われている捕獲が、現在どのように行われているのかということについての全国アンケート調査を基にした議論が行われた。その中で、ニホンザル個体群管理を行うにあたって、もっとも基本となる当面の具体的な目標の設定、そしてそれに基づいて計画を練り直していくというフィードバックが成り立っていないのではないかと強く指摘された。また年一万頭を超すニホンザル捕獲が十年以上続いているにもかかわらず被害が減少するには至っておらず、また捕獲の効果も不確かであるかどうすれば被害を抑えることができるのかは、まだ暗中模索の状態であることも確認された。今回はより具体的に現場の実情に基づいて、個体群管理を進める上で実際にどのような問題があるのか、どのような点を解決していかなければならないのかを考えるための場として、この自由集会は企画された。日本各地で野生ニホンザルの保護管理問題で活躍している方々に話題を提供してもらい、より具体的に現実的にこの問題を解決していくための方策を探りたい。

1. 「趣旨説明」 渡邊邦夫(京大霊長研)
2. 「銃器を用いた個体数管理、追い上げの実際と問題点」 宇野壮春(宮城のサル調査会)
3. 「滋賀県における集団捕獲の実施例から」 白井啓(野生動物保護管理事務所)・清野紘典(同関西事務所)

*2、3 はいずれも仮題、他に若干の地方自治体からの発表を予定している

F-24 増補版食虫類の自然史 10・日本産食虫類のレッドリスト再点検

世話人: ○横畑泰志(富山大院・理工)・川田伸一郎(科博)・森部絢嗣(朝日大・歯)

「食虫類の自然史」(阿部・横畑編、1998)の刊行からはや10余年、当自由集会シリーズの回数も2桁を数えるに至った。また、今年は「国際生物多様性条約締約国会議」(COP10)が名古屋市を中心に開催される国際生物多様性年である。本大会もこれを鑑みて2学会の合同大会となった。これらに相応しい内容として、日本産食虫類のレッドリスト指定状況の再評価を企画した。

環境省レッドリストは5年に一度見直され、現在は第3次の見直し作業が進行中である。今回の見直しではレッドデータブックの改訂も予定されており、それぞれの種について詳細に生息情報を把握することが必要である。日本哺乳類学会も哺乳類保護管理委員会のもとにレッドリスト作業部会を設け、組織的に対応しているが、必ずしも十分とは言えない。かつては日本の津々浦々をたった1人で巡って多くの食虫類を捕獲し、それらの生息環境を把握していた精力的な先達も存在したが、これからは多くの研究者のネットワークを構築していく必要があるだろう。申し込み時点で3つの報告を予定しているが、他の種も含めて参加者と活発な情報交換を行いたい。

0. 「趣旨説明」横畑泰志(富山大院・理工・理学)
1. 「センカクモグラはどうなのか」横畑泰志(富山大院・理工・理学)・横田昌嗣(琉球大・理)・金子正美・星野弘方(酪農学園大・環境システム)・小野貴司・南澤 舞(EnVision)
2. 「エチゴモグラはどうなのか」大野浩史・横畑泰志(富山大院・理工)
3. 「トガリネズミはどうなのか」森部絢嗣(朝日大・歯)

F-25 インタープリテーションは保全の現場で役に立つのか？ —専門家と現場のコミュニケーションを中心に—

世話人：富田涼都(静岡大学)・関根聡子(ネイチャーガイド)

インタープリテーションとは、相手の年齢・経験・ねらいなどに応じて、伝えたい情報の量や発信方法をアレンジするスキルである。このスキルは、自然体験学習などに応用され、環境教育の領域においてスキルの開発や人材育成などが行われてきた。しかし、単なる自然体験を志向したようなインタープリテーションでは、現実の保全現場での問題解決に貢献することが難しく、その意義が問われることも少なくない。

一方、保全活動は、社会的な実践でもあるため、地域社会をはじめとする現場とのコミュニケーションは避けて通れない。しかし、研究者をはじめとする専門家などは、野生動物などに関する専門的知識を持ってはいても「伝える」ことについては必ずしも精通していない。そのため、専門家と現場(非専門家)のコミュニケーションが不全となり、保全活動が滞ってしまうこともある。

そこで本集会では、インタープリテーションにおける「伝える」スキルの蓄積が、具体的な保全現場の問題解決に貢献する可能性と課題について、実践例も交えながら議論を行う。そこから、よりよい専門家と現場のコミュニケーションのあり方を模索し、獣害や自然再生、地域振興などの各種問題の解決へのシナリオを素描していきたい。

1. 「インタープリテーションの光と影 —自然体験活動の現場から」 関根聡子(ネイチャーガイド)
2. 「保全現場においてインタープリテーションに求められることは何か？」 富田涼都(静岡大学)
3. 「やまだらけの日本一人口の少ない町、早川町における保全を目的としたインタープリテーション」
大西信正(南アルプス生態邑/糶生態計画研究所 早川事業所)
4. 「博物館は保全にどうせまる？ —地域と科学をつなぐ学芸員の役割」 金尾滋史(多賀町立博物館)

F-26 木に縁りて魚を求む —「失敗事例」から学ぶケモノ対策

世話人：小寺祐二・江成広斗(宇都宮大学農学部附属里山科学センター)

ケモノによる被害問題が深刻化する中で、様々な「対策」がこれまで考案されてきており、近年それらの「成功事例」は書籍や雑誌の中でしばしば目にするようになった。一方、そうした「成功事例」をはるかに上回る数の「失敗事例」が現場には存在しているのであるが、これらが検証される機会は非常に少ない。そこで本集会では、あえてその「失敗事例」に注目してみたい。なぜなら、これまで繰り返されてきた数多の「失敗」を回避するためには、「どうしたら成功するのか」だけでなく、「なぜ失敗するのか」の視点が不可欠だからである。間違った対策では、いくら懸命に努力しても成功に導くことはできない。まさに「木に縁りて魚を求む」である。

本集会では、各地のケモノ対策の失敗事例を紹介する中で、それらの共通因子の整理を試みる。また、総合討論の時間に出来るだけ多くの時間を割き、被害問題に悩む多くの皆さんとともに、ケモノ対策の「失敗学」について考えてみたい。

1. 「失敗学の重要性」 小寺祐二(宇都宮大学農学部附属里山科学センター)
2. 「事例①：島根の失敗」 澤田誠吾(島根県中山間地域研究センター)
3. 「事例②：宮城の失敗」 宇野壮春(宮城・野生動物保護管理センター)
4. 「事例③：鳥取の失敗」 平田滋樹(長崎県農林部農政課, 前鳥取県農林水産部生産振興課)
5. 「まとめ：農家に正しい対策を使ってもらうために」
竹内正彦(農研機構 中央農業総合研究センター)
6. 「総合討論」

F-27 琵琶湖におけるカワウ問題

世話人: 須藤明子 (株式会社イーグレット・オフィス)

カワウ (*Phalacrocorax carbo*) は世界に広く分布する魚植生の鳥類で、1970年代には個体数が激減して絶滅が危惧されました。しかし、近年の急激な個体数増加にともない、カワウによる漁業被害と森林被害は全国に広がり社会問題に発展しつつあります。滋賀県には約 35,000 羽のカワウが生息し、琵琶湖の竹生島と伊崎半島に国内最大級のコロニーがあります。滋賀県のカワウ被害は国内で最も深刻な状況にあり、追い払いなどの被害防除に加えて、大規模な個体数調整事業を実施するなど、さまざまな取組みが行われています。

本自由集会では、現場の最前線にいる行政の担当者からカワウ被害の現状と対策について、また研究者からカワウの広域移動に関する最新の研究結果について、話題提供していただきます。少し長めの議論の時間を設け、参加者全員で琵琶湖のカワウ問題の解決にむけて知恵を出し合う機会にしたいと思います。

なお、本大会のエクスカッション(9月21日)において、琵琶湖におけるカワウ森林被害の現状を見学します。是非、エクスカッションとセットで、ご参加ください。もちろん自由集会のみの参加も大歓迎です。

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 「滋賀県のカワウ特定鳥獣保護管理計画」 | 三宅利彦 (滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課) |
| 2. 「カワウによる琵琶湖の水産被害」 | 佐野聡哉 (滋賀県農政水産部水産課) |
| 3. 「伊崎半島における生息地管理」 | 柴田隆文 (林野庁滋賀森林管理署) |
| 4. 「カワウの広域移動と琵琶湖のカワウ問題」 | 高木憲太郎 (NPO 法人バードリサーチ) |

F-28 野生動物学実習の現状と改善に関する集会

世話人: 高槻成紀 (麻布大学)・安藤元一 (東京農業大学)

この数年間、私立大学で野生動物学関連の研究室が新設される傾向があり、学生の人気も高いとされる。しかし多くの場合、歴史がないだけに、教育のノウハウも手探りでおこなわれており、困難や問題も少なくなない。その背景には少ない教員数に対して学生数が多いこと、学生の求めるものと現実の乖離などがあるように思われる。このことは野生動物と日本社会の関係を考える上でのさまざまな問題を擁しており、今後検討すべき課題である。世話人はこのような問題を認識し、そのひとつとして、各大学で試みられている野生動物学実習について、現状を紹介しあい、互いに参考にすべきものはし、改良点を議論する場を設けたいと考えた。今回はおもに首都圏にある私学を中心に、現在おこなっている実習の内容、その問題点、利点などについて報告してもらい、現状の改善に役立てることを目的とした。

参加予定大学は麻布大学、北里大学、東京農業大学、日本大学、日本獣医生命科学大学、立正大学であるが、飛び入りも歓迎したい。もちろん、事情の違いを比較するという意味で、国立大学からの参加も可能である。また、学生の意見も有意義であるので、学生の参加も歓迎したい。